

1. 武士道が著された動機

序文冒頭に、ベルギーの高名な法学者と散歩しながらの会話で、日本では学校で宗教教育をしないことに驚き、では道德教育はどうして授けるのか？と尋ねられた。その瞬間、彼は回答を用意していなかったが、それが本書を著すきっかけであったと書いている。このことは、本書を理解する上で大変重要な点である。

新渡戸稲造は、日本の当時の道德律を「武士道」と名付け、今から 120 年ほど前に西欧世界に提示したのである。

ところで、私は、なぜベルギーの法学者が宗教を道德の前提として当然のこのように考えるのであろうかといぶかる。今の私だったら、そのことをそのまま質問として投げ返すことであろう。「なぜ宗教教育がなければ道德教育が授けられないのか」と。宗教に対する根本的な態度の違いが、日本と西欧との間には存在することを表しているように思う。極言すれば西欧では「宗教の中に道德があり」日本では「道德の中に宗教があると」言ってもよいだろう。

どちらが正しいという議論ではなくて、大きな認識の差が存在するだけ、なおさらお互いを正しく理解する必要が、グローバル化した現代、ますます必要になってきているということである。

我が国の、歴史や思想、文芸について学び、同じく西欧の歴史、思想、文芸についても精通し、日本人でありながら世界を高い視野から理解できることが、文系・理系を問わず求められる時代になる。

2. 人の気高さは戦争で養われ平和で使い果たされる

第 1 章の脚注(text : 8 ページ)に Ruskin¹の見解が紹介されている¹¹。

Ruskin は戦争を礼賛するものでは決してないが、「人の気高さは戦争で養われ平和で使い果たされる」という。これは事実として認めざるをえないと述べている。Ruskin の考え方には納得させるものがある。私にも同じ経験があるからだ。私は 1960 に日立造船に入社したが、その当時の技術系の課長・部長は東大造船工学科卒の海軍技術将校上がりの方たちだった。その方たちは、私にはそろって人格者に写った。常に責任を自ら引き受け、部下には小言の少ない、そしてよく全体を把握しておられるように見えた。私は、いつかはその様になりたいと思ったものだ。日立造船だけではない、他社でも同じようである。なぜ彼らが、そうなのか。確かに当時の帝国大学造船学科といえば、全国的な秀才揃いであったことには間違いないが、それだけではないのではないか。日本をしょって立たなければならぬという責任感、むなしく戦死した同輩

に対する哀惜の念がそうさせるのではないかとおもうのだ。

先だって、同年配の友人が映画「風立ちぬ」を観てきた、昔の航空技術将校は、本当にえらいなあ！と感嘆したことがある。私は、その映画を観てはいないが、彼が言わんとするところは、すぐに理解することができた。

私のみるところ、もう戦争の遺産は食いつぶしてしまった。これからは新しい価値観を創造し育てなければならぬし、日本の若者の心の底には、その芽が隠れているように思うことが私の思いこみでないことを願う。

3. 神道について

武士道の源を仏教に求めるか神道に求めるか、峻別するのは難しいと思う。武士道という生活倫理規範は、西洋のように宗教的根源から神とのつながりにおいて派生したものではないからである。神道は宗教の一種ではあるが、教義もなく、偶像もない。日本人の自然崇拝を象徴するアニミズムで、神社とはいえ社の中は、なにもない空所である。鏡くらい置いてあるかもしれない。そこは神が下りて来られる場所である。原始日本人は、自然神を信じ、人間も動物も植物も自然の一部で、死んで自然に帰ると思っているのではないだろうか。後に近代宗教である仏教が入って来てからも、覇権争いが生じたわけでもない。

その様な民族のエトスというようなものは、容易に時代の変遷で変化するものではなく、「武士道」を100年後に読んでも共感を持つ由縁ではなかろうかというのが、私の今の仮説である。

後記：

H26年度大阪府立大学 A0 入試合格者 4 名の入学前教育で、英文 paperback2 冊と武士道を読ませた。読ませ、話し合うだけで講釈した分けではないが、参考に、本文を彼らに示した。

ⁱ John Ruskin(1819-1900) ビクトリア時代の英国の美術評論家。美術以外にも様々な分野に関する論評を著した。

ⁱⁱ 矢内原忠雄訳「武士道」(岩波文庫)P32 参照